【コラム】

「アナログレコード復活の現象学
－フッサールらの言説から浮かび上がる“豊かな製品の姿”－」

経済研究所 所長代理 北嶋 守

1. はじめに

近年、日本のアナログレコードの生産数量が復活する兆しを見せている（図１参照）。2022 年の年間生産金額は 43 億 3,600 万円に達し、1989 年以来 33 年ぶりに 40 億円を超えた。長らくＣＤ（コンパクトディスク）に主役の座を奪われ、消滅の危機にあったアナログレコードが何故、復活し始めたのか、その背景には何があるのか。そこで本稿では、このアナログレコード復活について、フッサールらの言説を参考に現象学的考察を試みる。

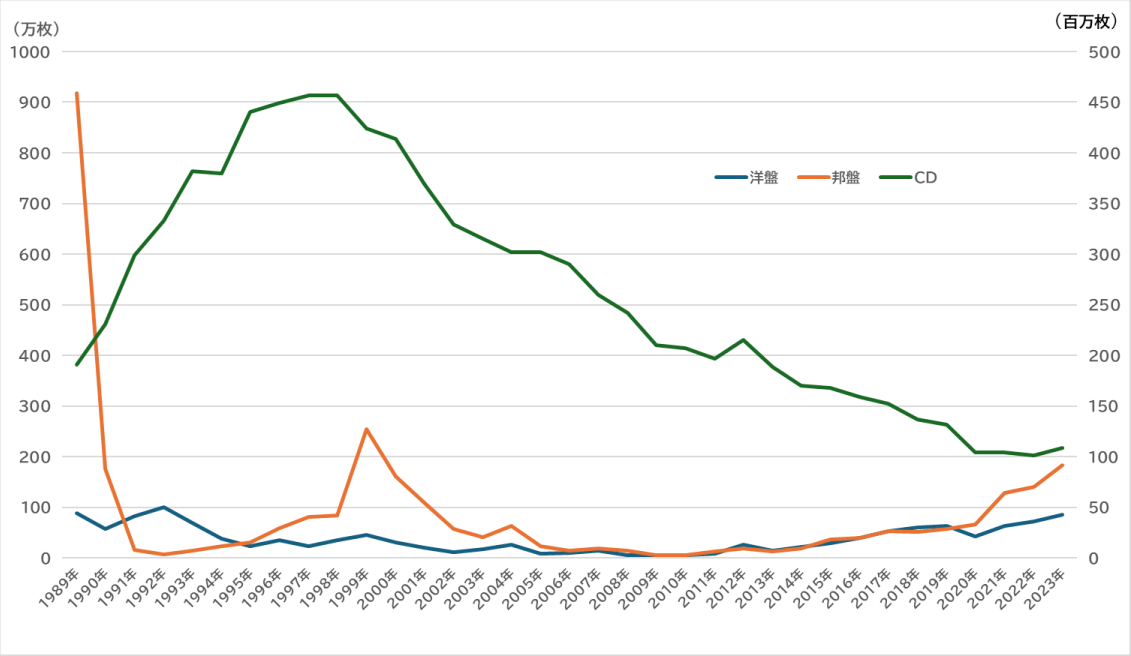

図１：日本のアナログレコード及び CD の生産数量の推移

注）アナログレコードは 1,000 以下を四捨五入。この図では、アナログディスクをアナログレコードと表記。

出所）日本レコード協会『日本のレコード産業』1999 年度版から 2024 年度版に基づいて作成。

2. アナログレコード復活の背景

アナログレコードの復活について、音楽ジャーナリスの柴那典は、アナログレコード人気は単なる懐古趣味的なブームではなく、その背景にはストリーミング配信による音楽消費の構造的な変化があるとした上で、スマートフォンで音楽を聴くことが普及し、様々な音楽に自由にアクセスできるようになった一方で、「好きな音楽を実際に所有している」という感覚を持ちづらくなったため、その解決策として、実際に針を落として再生するレコード音楽を選択し、ジャケットを飾ることで「所有欲」を満たすようになったと分析している [1]。この柴の分析は「人間の所有欲」に着目している点において非常に示唆深いものである。但し、同様の分析は、ソニー・ミュージックエンターテイメント（SME）社長水野道訓氏（当時）によって既に 2017 年になされている。彼は「ストリーミング（逐次再生）で手軽に音楽を聴けるようになり、お気に入りの 1 枚を『所有したい』という意識が芽生えた。デジタル音源では味わえないアナログレコード特有の温かい音や、アナログレコードを置いて針を落とすという『手間』を求める若者も多い」と分析した上で、同社は 2018 年 3 月までにアナログレコードの自社生産を 29 年ぶりに再開することを発表している [2]。つまり、アナログレコードの復活の兆しは、既に 2017 年頃から始まっていたのである。

ここで、本題に入る前に、アナログレコードの衰退の歴史について日本を例に簡単に俯瞰してみよう。まず 1970 年代のラジカセの登場によって音楽の再生や録音が容易となり、アナログレコード離れが徐々に始まった。しかし、この時期はまだオーディオ機器の全盛期でもあったため、アナログレコードの需要はそれなりに維持されていた。その後、大きな変化が 1970 年代の終わりに訪れる。ソニーのウォークマンの登場である。この製品によって音楽を聴く環境は一変し、「音楽は部屋で聴くもの」といったライフスタイルが崩壊する。さらに 1980 年代後半からＣＤが登場したことで、アナログレコードの生産量は急速に減少し、1990 年代半ばからはインターネット社会が到来し、2000 年代にはアップルの iPod やスマートフォンが世界的に普及し始めたことによって、音楽のダウンロード配信、ストリーミング配信が可能となり、アナログレコードは完全にとどめを刺され表舞台から消えて行った。そして、このダウンロード配信やストリーミング配信は、アナログレコードだけでなくＣＤの衰退をも促すことになったのである。

ところが、近年のアナログレコードの復活である。柴の「人間の所有欲」が復活の一因だとすれば、むしろアナログレコードより再生が手軽でしかも所有欲をある程度満たすことができるＣＤでも十分なはずである。しかし、図１に示したように、日本におけるＣＤ生産数量は 1990 年代の終わりをピークにその後は急速に減少しており、アナログレコードのよ

---

[1] 柴（2023）を参照。

[2] この水野氏の分析については、『日経産業新聞』2017 年 6 月 30 日掲載記事「アナログレコード復活、SME、29 年ぶり生産再開」を参照。

うな復活の兆しは感じられない。このことから、アナログレコード復活の要因を「人間の所有欲」にのみに限定すべきではないだろう。さらに驚くべきことに、米国では既に 2020 年にアナログレコードの売上がＣＤの売上を 34 年ぶりに上回るといった現象が起きている。今、アナログレコードは日本だけでなく世界的なブームになっている。では、なぜ、音楽を録音し再生するために非常に手間暇のかかるアナログレコードが復活しているのだろうか。

3. サックスの鋭い考察

こうした私の疑問に答えてくれるのが、米国のジャーナリストサックスが著した『アナログの逆襲』[3]である。彼はこの本のパート１「アナログな『モノ』の逆襲」[4]の第 1 章で「レコードの逆襲」を取り上げ、復活の要因について３つを指摘している。そこで、その内容を私なりに整理してみると次のようになる。

第一に、アナログレコードは死んでおらずレコードを望む一定の市場は常にあった。忠実度（音を正確に記録したり再生したりする度合い）に取り憑かれたオーディオファン、組織に反発する若者、ドイツのジャングルＤＪ、裕福なコレクターたちがニッチ市場を守り、多くのレコード店、プレス工場、ターンテーブル・メーカーが、どん底の時期を生き延びることができた（ニッチ市場の存続）。第二に、デジタルにほぼ抹殺されたアナログが、デジタルによって助けられた。ＭＰ３[5]の登場はレコードよりもＣＤに打撃を与え、ＣＤは移動性にすぐれて場所をとらないＭＰ３にいたる、さびれた通過駅に成り下がった。その間に、レコードのかつての欠点が魅力に転じた。レコードは大きく重みがある。それに、お金と努力とセンスがなければ、作ることも、購入することも、聴くこともできない。さらに、親指でそっとなぞり、状態を確かめてくれと訴えてくる。購入者は、お金を払って手に入れるからこそ、所有していると実感できる。それが誇りにつながる（デジタルからの“恩恵”、所有欲・誇りの充足）。第三に、レコードの復活は非常に計画的であり、それはレコード・ストア・デイの登場である。このレコード店の祭典は、レコードのリバイバルブームをメインストリームに押し上げる最後のひと押しとなった。このレコード・ストア・デイは、音楽フェスティバルみたいに大勢が集まって音楽を祝う機会を提供するもので、人々がコミュニティとつながることの必要性を再認識させた（コミュニティの必要性の再認識）[6]。

4. 水平に流れ去る時間と垂直に積み重なる時間

---

[3] Sax（2016）を参照。

[4] このパート１では、「アナログレコードの逆襲」のほかに第 2 章「紙の逆襲」、第 3 章「フィルムの逆襲」、第 4 章「ボードゲームの逆襲」を取り上げている。詳細については、Sax（2016）を参照。

[5] MP3（MPEG-1 Audio Layer-3）とは、音響データを圧縮する技術の１つ。

[6] 以上の３つの要因の詳細については、Sax（2016）pp.36-47 を参照。

このように、アナログレコード復活の背景には、①ニッチ市場の存続、②デジタルからの“恩恵”、所有欲・誇りの充足、③コミュニティの必要性の再認識、以上の３つの要因があるようだ。私は、このサックスの考察を踏まえて、アナログレコード復活という不可思議な現象の背景には、「時間」という概念が深く関係しているものと考えている。そこで、哲学者フッサールの言説などを参考にその謎を紐解いてみたい。

フッサールは、「水平に流れ去る時間」と「垂直に積み重なる時間」からなる時間表という概念図を残している。本稿では、それを私なりに解釈してアナログレコードで音楽を聴くという行為の時間表を作成してみた（図２参照）。この図に示したように、アナログレコードで音楽を聴くプロセスは、非常に手間暇のかかる行為である。現在、アナログレコードや専用のレコードプレーヤーは通販サイトから購入することができる。また、中古レコード店に直接出かけて好きなレコードを探して購入することもできる。購入したアナログレコードを聴くには、フォノイコライザー、アンプ、プレーヤーなどの機器を部屋に設置する必要があるが、スピーカー内蔵型レコードプレーヤーでも十分である。

しかし、アナログレコード（以下、レコード）で音楽を聴くためには、次のような複数の段階が必要になる。①レコードジャケットの保存用の袋からレコードを取り出し、レコードクリーナーでレコード盤の表面のゴミをエアダスターなどで除去する。②マイクロファイバークロスあるいはクリーニング専用ブラシで綺麗にする。③レコード針に埃が溜まっていたら針もクリーニングする。④レコードプレーヤー及びアンプの電源を入れる。⑤レコードをターンテーブルにセットし面の状態と回転数を確認した上で回転スイッチをオンにする。⑥レコードが回り始めたら静かに針を落とし（少しの待ち時間の後）曲を聴く。⑦曲を聴き終わったらターンテーブルから慎重にレコードを取り上げて保存用の袋に入れてジャケットに保管する。⑧曲の演奏前、演奏中、演奏後など人それぞれの好みではあるが、ジャケットのデザインや曲の解説文などを楽しむ。⑨また、これも人ぞれぞれの好みではあるが、ジャケット（レコード）コレクションを部屋の棚に保管したりジャケットを壁に飾ったりしながら自分なりの“音楽空間”を構築する。

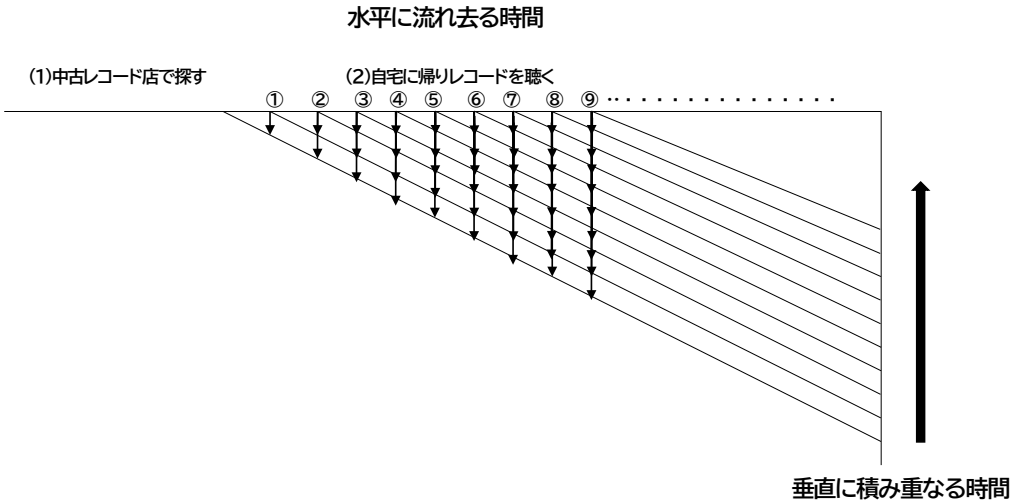

図２　アナログレコードで音楽を聴くという行為の時間表

注）この図は、中古レコード店に出かけレコードジャケットを繰って自分の好きなアナログレコードを購入する場合を想定している。

出所）浜（2010）p.469 掲載の「フッサールの時間表」を参考に筆者作成。

浜（2010）によれば、アンダーソンの時間表が「水平に流れ去る時間」のなかで現れては消えいく出来事の連鎖を表しているのに対して、フッサールの時間表は、現れては消えいく出来事が流れ去ってしまうことなく垂直に積み重なっていくことを表現している[7]。

つまり、私は、アナログレコード音楽の魅力は、デジタル技術を活用した一連の音楽（デジタル音楽）よりも、フッサールの言うところの「垂直に積み重なる時間」が相対的に豊富な点にあるのではないかといった仮説を持っている。フッサール自身、音楽を聴くことを例に時間表を示し、ある音が鳴り、それはやがて時間とともに消えていくのではなく、その音は失われてしまうのではなく、消え去った後も保持し続けるとし、この「過ぎ去りつつあるものをなお現在に繋ぎ止め・保持するはたらき」（過去把持：過去を記憶に留めること）を指摘した[8]。

私は、アナログレコードで音楽を聴くという行為には、デジタル音楽のようにただ単に曲を選択し演奏を聴くのはなく、聴くまでの段取りの時間、聴いている時間、聴き終わった後に要する時間の全てが含まれているのではないかと考えたのである。つまり、中古店に出かけて店員と好きなジャンルの話をしたり、店内にランダムに並ぶレコードジャケットを繰って自分の好きなアナログレコードをやっと見つけ、それを宝物のように大切に小脇に抱

[7] 浜（2010）p.471 を参照。

[8] シュッツは、過去把持の連続体はしだいに沈殿し「経験のストック」として蓄積されていくと述べている。このシュッツの言説については、浜（2016）p.473 を参照。

えて自宅に帰り、丁寧に掃除してオーディオ機器にセットするといった手間暇のかかる行為によって、「垂直に積み重なる時間」は厚みを増し、そのことが「豊かな時間」をつくり出しているのではないかと考えたのである。では、「豊かな時間」とは何なのか。それは私たちの想起と関係しているものと考えられる。デジタル音楽であれアナログ音楽であれ、曲を聴くことで私たちはその演奏から、情景、人、歴史、文化、感情、場所など様々なことを想起し「豊かな時間」を得ることができる。だが、アナログレコードで音楽を聴くという行為は、音楽自体から生まれる想起だけでなく、その音楽を聴くことに要している一連の行為全体が想起を誘発する多くの「きっかけ」を内包しているため、デジタル音楽以上により「豊かな時間」を私たちに提供してくれるのではないだろうか。

5. 「便利な製品」と「豊かな製品」

想起は、言語行為ではなく、モノや空間、そこを移動する人間の身体的行為と結びついているとされる[9]。これまで指摘してきたように、アナログレコードで音楽を聴く行為は、デジタル音楽と比べ手間暇のかかるものである。換言するならば、アナログレコードで音楽を聴く行為は、デジタル音楽よりも身体的行為の度合い強く、そのことがより多くの想起を促すことになる。またそれは「空間がいざない導く想起」とも言えるのかも知れない。

デジタル音楽を「便利な製品」と呼ぶならば、アナログレコードは決して「便利な製品」ではない。しかし、それはデジタル音楽よりも私たちに想起を誘発する「きっかけ」を多く内包している「豊かな製品」なのである。しかしながら、デジタルとアナログが決して敵対して存在しているわけではない。サックスが指摘したようにデジタル音楽の進化が、アナログレコードの価値を再認識させているだけでなく、インターネット社会・デジタル社会はアナログ音楽やそれに必要な機器の情報を世界規模で伝達・拡散してくれている。その意味では、アナログレコードは、あたかもインターネット社会・デジタル社会という巨大な波を巧みに乗りこなしているベテランサーファーのような存在なのかも知れない。

6. おわりに

近年のアナログレコードの復活は、それを聴くために必要な様々な機器や器具、つまりオーディオ機器やオーディオアクセサリーの市場をも再活性化し始めている。例えば、東京に本社がある精密部品メーカーでは、新工場を秋田県湯沢市で開設し、レコード針の生産能力を従来の 3 倍となる月産 1 万 5000 個に引き上げている[10]。また、新潟県三条市で自動車用金型を手掛けている企業では、新事業展開の一環としてオーディオアクセサリーの製造を

---

[9] 浜（2016）p.468 を参照。

[10] 『東京読売新聞』2023 年 9 月 14 日掲載記事。

開始し米国市場への販売を目指している[11]。このように、アナログレコードの復活は、機械産業にも少なからずプラスの波及効果をもたらし始めていることから、日本の機械産業の今後の方向性を考える上でも「便利な製品」だけでなく「豊かな製品」とか何かといった視点が必要なのではないだろうか。

参考文献

機械振興協会経済研究所（2024）『モノづくり中小企業における「両利き経営」の特質－事例調査に基づく多角的考察－』

柴那典（2023）「若者世代が牽引するアナログレコード人気再燃と『RECORD STORE DAY』（2023 年 4 月 22 日）。https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/ea56a486419814151aae12980345ae1247ecaabb（アクセス日：2024 年 7 月 5 日）

日本レコード協会（1999）～（2024）『日本のレコード産業』。

浜日出夫（2010）「記憶と場所－近代的時間・空間の変容－」『社会学評論』60（4）465-480。

Sax,David（2016）*The Revenge of Analog: Real Things and Why They Matter*, PublicAffairs.（加藤万里子訳（2018）『アナログの逆襲－「ポストデジタル経済」へ、ビジネスや発想はこう変わる－』インターシフト）。

[11] 機械振興協会経済研究所（2024）pp.34-37。